

85

July
2009

●発行所 稲門建築学会 村松 映一
 ●編集者 稲門建築学会広報委員会(委員長・小菅亮三)
 ●発行所 稲門建築学会
 〒169-8555 東京都新宿区大久保3-4-1
 早稲田大学理工学術院55-5-02-01
 電話・ファックス 03-32008-0640
 ホームページ <http://www.all-waseda.com/kogakkaifoumon/arch/>
 電子メール tounonji@poppy.ocn.ne.jp
 制作 都市建築編集研究所
 DESIGN: KAKEI GRAPHICS
 © 稲門建築学会

- 巻頭言 日本建築学会会長に就任して……佐藤滋
- 速報 建築学科 JABEE 認定を取得
- 宇田人今和次郎……中谷 礼一
- 仮想座談会「改正建築士法で考えるこれからの建築士」……構成 曹川士朗・間瀬博平・末延史行
- 2009年春の大会報告
- 2008年度職域別会費納入率ベスト40発表
- 内井昭蔵ライブラリー公開懇談会報告

Waseda Architecture

News of

早稲田建築ニュース

巻頭言

佐藤滋
早稲田大学教授
 苗S48・院S50・博S55

日本建築学会会長に就任して

稲門建築会の皆様のご支援で、日本建築学会の第51代会長に就任いたしました。戦後生まれ初の会長ということで、身の引き締まる思いです。

建築雑誌の挨拶には様々な行動目標を掲げました。あの先輩に「難問山積みで……」とご挨拶したところ、「課題はいつも山積しています。気張らず淡々と、しかし、着実に」と返信をいただきました。まったくその通り、これまでの学会の輝かしい成果を引き継ぎ、発展させられるよう活動したいと思えます。

さて、私が真っ先に進めたいことは、学会の社会貢献を目に見える形にして行動することです。そして、それをもとに、新たな建築のフロンティアを開拓することです。佐藤功一先生は建築学会の講演で「吾々は建

築の意識をずっと広義に解釈して問題の直接たると間接たるとを問はず充分に社会建築家たるの職分を尽したいと存じます」と述べています。社会派の今和次郎先生に対し、芸術派と目される佐藤功一先生もこのようにお考えであったのであり、早稲田建築の基盤を確認できます。建

築の概念を、逆風にさらされている今こそ、より広く解釈し、社会貢献を基本に、建築家の職分を果たすことが、私たちの使

命であると考えています。

この社会には「建築」が核にならなければ解決できない問題がまさに山積みです。近い将来、首都直下、東海・東南海地震がわが国の重要な地域を襲うのは避けられない事実ですし、超高齢社会での安心・安全な地域社会の形成、そして何よりも地球環境問題への対処等は、建築が中心になってその概念を広く解釈し、活動領域を広げること初めて解決できるのです。

学会は新法人化に向けて定款の改定に取り組みむことになっていきます。その中に「社会貢献」を明確に位置づけ、建築のニューフロンティアを社会にアピールできたらと考えています。



早稲田大学創造理工学部建築学科ならびに同大学院創造理工学研究科建築学専攻建築芸術分野建築史、建築計画、都市計画)の教育システムが、2008年度の日本技術者教育認定機構(JABEE)による認定プログラムとして認定されました。

また、同時にJABEEによる建築学分野における修士課程「建築設計・計画」プログラムの審査・認定システムが、UNESCO(註1)・UIA(註2)による建築教育プログラム認定制度としても世界で初めて承認され、2008年度以降の建築学云

今後への第一歩となる 共同課題に取り組み

新入生 オリエンテーション 報告

本年度の新入生オリエンテーションが、5月23、24日軽井沢セミナーハウスにて開催されました。180名余の学部1年生と9名の教員、9名の助手に大学院修士のTAが参加し、TAの指導のもと学部1年生がグループに分かれてワークショップを行う内容です。今年度の課題は、「1週間建築〜竣工後1週間で解体される建築を提案する」。翌朝までの限られた時間の中、活発に意見交換を行いながら共同で課題を仕上げていくという、これから建築を学んでいく上での基礎となるイベントです。

稲門建築会は、夕食時の懇親会を後援し、新入生が先生方や諸先輩と授業を離れてコミュニケーションを持つ場を提供すると共に、理事が参加して稲門建築会の内容と活動状況を新入生に紹介しました。今回は、週末の高速道路料

宇宙人・今和次郎

中谷礼仁(早稲田大学准教授/苗52・院H1・博H10) 建築学科1年生の授業の最初に、宇宙人について話す。

正確にいうと、宇宙人から見ても感動できる建造物とはどんなものだろうか、という話をするのだ。もちろん本場の宇宙人のことなどわかりはしない。しかしこの指摘は大事な側面を忘れていない。それは人間も、実は地球人という宇宙人なのだということがある。だから人間の中にも、宇宙人的な視野で人間のつくったものを根底的に見直すという人物が稀に現われる。たとえば、コルビュジエはその代表格であろう。そして早稲田建築の歴史の中にも宇宙人的な存在は割合多いように思う(人間くさい割合も相当多いが)。とりわけ宇宙人の高い人物といえ、今和次郎と、吉阪隆正ではなからうか。というわけで、いつもその授業では今和次郎を宇宙人として紹介するのであった。

今和次郎や吉阪隆正、彼らはいずれもエスタブリッシュされた芸術の世界よりは、より具体的に日常的な事物に関心があった。しかし「ハイアート」「日常」という分類のほかに「曲者」「アート」の世界こそが意外に人間くさく、むしろ日常的なものの中に驚くべきもの、発明的なものが見出されるのである。今和次郎はすでにそれを若い頃に知り抜いてしまった。

今和次郎の目を検討するために、ここで彼が描

術分野修士生は国外での建築家資格受験要件に
関し、一定の互換性を与えられる予定です。

早稲田建築の総合的かつ柔軟な教育方法に国内外の標準的教育方法が包含されていること
の確認は、今後の教育カリキュラムの展開においても意味のある結果であったと思われ
ます。

なお、詳細については次号「早稲田建築ニュース」86号で報告の予定です。

(註1) United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization
(註2) International Union of Architects

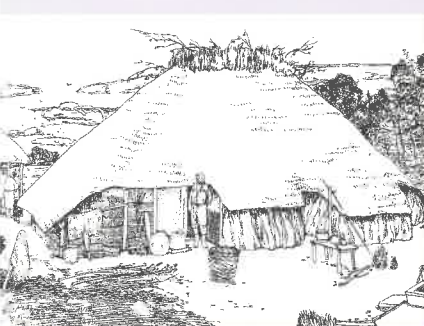


上: 集合写真 下右: ワークショップ風景(1日目) 下左: 学生による発表の様子(2日目)

金1,000円上限制度の影響と思われる交通渋滞により、セミナーハウスへの到着が2時間以上も遅れたため、ワークショップの開始も大幅に遅れました。懇親会の時間も削りながら、夜を徹しての作業となり、新入生にとってはギリギリの状況で課題を仕上げていく感覚を得る、貴重な経験になったのではないのでしょうか。清水和彦(総務委員会委員長/苗53)

いた1枚の絵を見てもらいたい(上図)。この絵は彼が非常に若い頃、ちょうど芸大を出て早稲田大学建築学科の助手になった頃に参加した民家調査のために描かれたものである。その「田舎の家」の絵は、すでに今の目が社会化された人間の目を超えて対象そのものに限りなく接触していることを示している。

「社会化された人間の目」とは、たとえば職能による対象のとらえ方の限定をいう。たとえば建築史学者であれば、その主要目的は家の姿や建ち方であるから、生き生きとした人間(むさび農夫)は描かれないのである。逆に今は、そこにある事物の集積の関係性を自由に移行して描き出す。もちろん人間が主役なのではない。主役はその場所自体である。軒先の低い開拓小屋で、真ん中にほかむりをした男が立ち、そのまわりに彼の生活を支える諸レベルの事物が注意深く描き込まれる。外におかれた小机の上の什器、彼の視線が投げけるほうを見ればなぜか畑に建てられた棒の上で干されるムシロ、その奥には連れ合いの姿。そしてそ



上: 白茅舎「民家圖集」(洪洋社、大正年)の表紙。今和次郎のペンによるもの。

下: 秩父調査の際に描かれた小屋の家の内部(『日本の民家』より)。ここでも事物すべてを描き、その関係性をあぶり出そうとする今の意識が明瞭に見て取れる。

●第10回稲門建築ライブラリー公開懇談会
第10回稲門建築ライブラリーは安東勝男先生の特集です。日時・会場等詳細は未定ですが、今回もゲストをお招きして懇談会も予定されております。学生、OBの皆さんのたくさん参加をお待ちしております。

開催日: 2009年10月(予定)

●第6回OBによる仕事紹介のお知らせ

稲門建築会OB諸氏と学生の「仕事紹介」を通じて「コミュニケーションの場」として例年好評を博している「OBによる仕事紹介」も、今回で6回目となりました。就職を考えている学生諸君が、様々な企業の先輩諸氏と本音で語り合える貴重なチャンスです。学生の皆さん、OBの皆さん、年の瀬の土曜日の午後、仕事についてお互い本音で語り合いましょ。

開催日時: 2009年12月19日(土) 13:00~19:00
場所: 早稲田大学理工学部院57号館および55号館

参加申込: 第2部以降の企業の参加を受け付けます。
申込先: 稲門建築会事務局
tounonji@poppy.ocn.ne.jp

申込期限: 2009年9月18日(金)

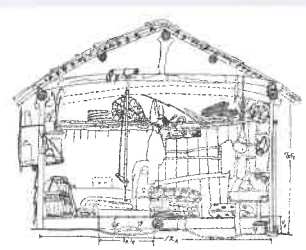
参加費用: 2万円(ブース設置及び懇親会費として)

プログラム:

- ・第1部「業種別仕事紹介」 大教室での業種別説明会。各業種を代表するOBによるプレゼンテーションと質疑応答で、建築関連業界全体を俯瞰。
 - ・第2部「企業別仕事紹介」 40社以上の参加企業ブースを学生が自由に回り、各企業のOBと個別面談。
 - ・第3部「OBと学生の懇親会」 立食パーティーで学生とOBが本音のコミュニケーション。
- 関洋之(理事・会委員長/苗52・院S4)

の屋根の形と呼応するかのような背景の山々。ここではすべての事物は緊密に結びあい、必然的なのである。宇宙人ならこういう絵を描くだろう。自分を宇宙人にする。それはなお、現在においても魅力的である。

たとえば統計分析における観察者は対象に対して客観的な立場を示す。しかしそのような立場を可能にするのは、観察者にとって分析対象が操作可能であることが前提である。転じて、今のようにスケッチすることは、その対象が観察者にとってむしろ操作不能なほどに崇高だからである。各地の民家の持つヴァリエーションは、もちろん単一でもなく、ましてや無限でもない。それぞれの条件に左右されながら、その場所の縁によって必然的な形態に結実する。その姿は観察者にとっては驚くほどに感動的でありながら、その感動はその対象が自らにとって疎遠な存在であるがゆえに生じる。対象に肉薄しようとする今のスケッチの裏にはそのような対象に対するニヒルな距離が常につきまとっていた。その空間が、都市論や民家研究とい



いう大きな視点から始まり、次第に時代と機敏なリンクをつくり続けていった今和次郎すべての活動に共通する質を保持している。早稲田建築の中にこんな宇宙人がいたことを覚えて欲しい。

仮想座談会

改正建築士法で考える これからの建築士

5月27日、改正建築士法の全面運用が始まった。世間の関心を集めた建築基準法の改正に比べるとさほど注目もされず、淡々と進んでいるようにも見える。しかし、今回の改正は今後の建築士の職能のあり方を大きく変えるものとなる。改正建築士法に対し、どのように向き合えばよいのか。ふたりの稲門OBと現役学部4年生による仮想座談会をまとめた。

- 登場人物……
- Aさん…1958年生まれ。設計事務所からまちづくりコンサルタントに転職した稲門OB
- Bさん…1956年生まれ。建築行政に携わる稲門OB
- Cさん…1986年生まれ。建築学科4年生。大学院進学予定

受験資格▼設計実務経験が必要に

A 私は20数年前、設計事務所に勤め始めてから数年後に一級建築士の資格を取った。当時は受験資格なんて特に気にしなかったけれど、今回の建築士法改正ではかなり厳しくなったよね。

B そうなんだ。一級建築士を受験しようとする、大学の建築学科を卒業するだけでなく、国が指定した科目を履修している必要がある。実務経験についても、従来は都市計画や建築教育の仕事、大学院の在籍も実務経験として認められていたけれど、それらだけでは認められなくなる。

C 先輩方のように、修士課程を修了してすぐは一級建築士を受験できなくなるのですか。

B いや、必ずしもそうではない。設計などの実務と同等のカリキュラムを修めればよいことになっている。ただ、これまでのように大学院を出れば誰でも、ということではなくなってしまう。

A これから入学する学生は、その辺を承知のうえで何を学ぶかを選択するということだな。

B そう。将来一級建築士の資格を取る人は、設計の仕事を中心にする人が多くなるといえるんじゃないかな。

A 私も設計事務所から今の会社に移って以降は再開発のコンサルティングばかりで、設計はまったくやっていない。でも、名刺には「一級建築士」と刷ってあるから、名刺を受け取った人は「設計をしている人」と思うだろうね。自分でも「建築士」として何なのか、よくわからなくなることがある。

歴史▼戦後に生まれた建築士法

B そもそも第2次大戦前には、日本には建築の専門家に関する公的な資格がなかったんだ。

C えっ!? それで問題は起きなかったんですか。

B 問題がないわけではなかったらどうけれど、最近の構造計算書偽装事件のような社会を揺るがす問題が起きたとは聞いていないな。

現在の建築基準法の前身である「市街地建築物法」の時代、東京や大阪では、建築の届出等の手続きを行う「建築代願人」の制度を条例で設けていた。試験に合格するか、学校で建築を学んでいれば建築代願人になれたんだが、これは趣旨からいって設計資格制度ではない。今の「建築士」とはまったく別物と見るべきだろう。

C なぜ建築の資格がなかったんでしょうか。

B 大正3年(1914)、建築設計を業務とする人たちが中心になって「全国建築士会(翌年「日本建築士会」と改称、現在の日本建築家協会の前身)」を設立し、建築設計の専門家資格設立に向けて活発に活動した。しかし、同会が帝国議会に提出した「建築士法」案に、建築士は土木建築に関する請負業及び建築材料に関する製造販売業の業務をすることはできない、という規定があった。いわゆる兼業禁止(註1)の規定だね。これが建築業界の強い反発を呼んだという。

C どうしてですか。

B 当時は木造の住宅や店舗の新築が大半で、棟梁などの木造建築専門の人たちが今という設計、工事監理、施工を一手に担い、徒弟制度を基に必要な技術も継承し、社会的に十分評価を受けていた。彼らには、兼業禁止規定など迷惑な話だったと思うよ。また、当時は珍しかった鉄筋コンクリート造などの大規模建築物は、建築に関する高等教育を受けた人たちが組織に所属して設計するから、資格がなくても何ら問題はなかった。様々な議論があったようだが、結局は、社会がそれほどには必要性を認めなかったということだろう。

C なるほど。ところで今の「建築士」の制度はいつできたんでしょう。

B 現在の建築士法は、昭和25年(1950)5月24日に、建築基準法と同時に公布され、同じ年の7月1日から施行された。

建築士法	建築基準法	世の中の出来事
'50 建築士法制定	'50 建築基準法制定	
'51 建築士法改正 ・業務仕向範囲の設定 ・一級建築士 3,100名に交付		
'64 建築士法改正運動 ・設計と施工の分離論争	'61 建築基準法改正 ・法的に超高層ビルが可能に	'68 震が関ビル竣工
'83 建築士法改正 ・木造建築士の創設	'81 建築基準法改正 ・新耐震基準の適用	'78 宮城県沖地震
'09 建築士法改正 ・構造一級建築士・設備一級建築士の創設 ・定期講習の受講義務づけ、受験資格の見直し ・一級建築士登録 合計33万人	'99 建築基準法改正 ・建築確認業務を民間開放	'95 阪神・淡路大震災
	'07 建築基準法改正 ・建築士の業務の適正化、罰則の強化	'05 構造計算書偽造事件

C 60年も前からあるんですね。その時は、どんな目的でつくられたのでしょうか。

B 建築士法は議員提案法案で、当時32歳だった田中角栄議員など7人が連名で法案を提出した。国会の審議では、「建築物の災害などに対する安全性を確保し、質の向上を図るためには、建築は専門の知識や技能を有する技術者が担う必要がある。そのために、技術者の資格を定めて技術の水準を確保し、業務に対する責任制度を確立する」といつている。さらに、「今までの監督行政を脱し、民主的な建築行政を確立する」ともいつている。それまで警視庁が「オイ、コラ」式の建築指導をやっていたのを踏まえてのことだ。

A 極めてまっとうだね。もう少し具体的には?

B 建築士資格は一級建築士と二級建築士に分かれ、一級建築士は鉄筋コンクリート造建築物や大規模公共建築物、二級建築士は木造建築物が主な担当と想定していた。今では木造建築士が追加されているが、基本的には変わっていない。また業務については、「他人の求めに応じ報酬を得て」建築の仕事をする場合には、建築士事務所として登録することが求められた。だから建築士が自宅を設計する場合などは、登録事務所の所員として設計をする必要はない。これも、今も同じだ。

あと、これは建築基準法になるけれど、市街地建築物法時代には建築確認(註2)の制度はなく、大きな建築物は知事が「認可」(註3)し、その他の建築物は「届出」(註4)とされていた。

A つまり、建築士法で定められた資格を持つ人が、建築基準法に定められた基準で建物を設計する。それらを役所が「確認」する。それによって、民主的なスタイルでの建築物の質の確保が図れる。そうするとやはり、建築士は設計の仕事のために与えられた資格としか考えられないな。

B 本来はそうだったはずなんだ。

業務▼意匠、構造、設備がひとつの資格

A でも実際には設計以外の仕事をしていても、建築学科を出れば建築士試験を受験できる。設計の経験がまったくない建築士も大勢いるよね。

B 実は私もそうなんだ。建築士の資格を取って

◎建築士法はこう変わった!

建築士法の改正は、建築基準法の改正と同じく平成17年11月に発覚した構造計算書偽装事件をきっかけに実施された。同様の事件の再発防止と消費者保護が目的である。建築士法の主な改正内容は次の4点である。

- ① 建築士の資質・能力の向上
定期講習の受講義務付け、受験資格のうち学歴要件及び実務経験要件の見直し、試験内容の見直し
- ② 高度な専門能力を有する建築士による構造設計及び設備設計の適正化
構造設計一級建築士及び設備設計一級建築士による設計または法適合チェック
- ③ 設計・工事監理業務の適正化
重要事項説明、一括再委託の禁止
- ④ 団体による自律的な監督体制の確立
建築士事務所協会の法定化

20数年になるが、仕事として設計や工事監理をしたことは一度もない。「専門は何か」と聞かれれば「建築」と答えるが、「じゃあ、設計をしているんですか」と聞かれると「違う」といわざるを得ない。でも、一般の人にとって、設計をしない建築の専門家という存在は不思議だろうね。

日本の建築士制度については、この辺りが昔から議論のあるところで、今も決着していない。

A ということ？

B 海外では、いわゆる意匠設計に携わる人のみを建築士の資格の対象としている国が多い。構造設計や設備設計をする人は、エンジニアとして建築士とは別の資格になっている。ところが日本では、意匠設計以外の業務をしている人でも、建築に関する包括的な一定の知識と経験があれば建築士の資格を与えている。ではいったい建築士は何をする人なのか、よくわからなくなっている。

C 設計事務所に所属してなくても、建築士として仕事をされている先輩方は多いと聞きました。

B もともと日本では設計が独立した業務として認知されていなかった。近代以降も、施工会社や役所、建築とは関係ない会社の施設担当部署などで設計業務に携わる人は多かった。だから、設計事務所以外に所属する人にも資格を与え、建築物の質を確保する必要があった。ただし、これも本当にそれで良いのかどうか昔から議論がある。

A つまり、どういふことかな？

B 資格を与えることが必要だとして、意匠設計以外の人には与える建築士の資格と意匠設計の人に与える資格が同一でいいのか。しかも、その資格は意匠設計をすることを前提としたものなんだ。

A 今回の建築士法改正で、そのあたりにメスが入った、ということだな。

B 構造計算書偽装事件を受けて、確認申請時の構造のダブルチェックは平成19年6月から既に行われている。今回は構造設計をする側についても縛りかけた。構造設計一級建築士の関与により、安全性・専門性の確保と責任の所在の明確化を狙ったわけだ。設備設計一級建築士も同じ考え方が、基本的な枠組みが変わったわけではなく、今の建築士の仕組みの中に構造設計一級建築士、設備設計一級建築士という資格をつくっている。

A なるほど。でも、そのダブルチェック、例の「テハン」構造計算適合性判定^{註5}について、構造事務所の知人は「なくしてほしい」といつている。

B でも、従来のやり方がまずかったから構造計算書偽装事件が起こった、というのが国の立場だ。

A それは、役所や民間確認検査機関のチェック体制に問題があったからではないのかな。チェック自体が難しいのであれば、何人も手を煩わせて安全性を確保するのではなく、社会的に十分認められた建築構造専門家の資格をつくり、その人の責任のもとで構造設計をやってもらおう。そうすれば、テキハンなんか必要ないと思うが。

B それはそうかもしれない。確かに今回、一級建築士の枠組みの中とはいえ構造専門家の資格をつくったわけだから、その人が作成した構造計算書を再チェックするというのも妙な話だ。

A それと構造設計一級建築士と設備設計一級建築士、特に設備の人が少なくて困っていると聞く。

B 国土交通省の話によると、数の上では一応充足しているとのことだよ。でも地域的に偏在しているのは事実で、どうしても東京や大阪に集中す

る傾向にある。地方の設計事務所が構造設計一級建築士や設備設計一級建築士を確保するのは、骨が折れるかもしれない。そのために各県にサポーターセンターを設置し、紹介も行っているそうだ。

消費者保護▼求められる説明責任

A ところで、構造計算書偽装事件ではマンションの購入者が一番の被害者だったね。

B そのとおり。そこで今回の改正では、消費者保護をかなりはつきりと打ち出している。建築士法には設計を業として行う場合に関する規定もあるが、消費者保護の点から見ると不十分だった。そこで、説明責任などの面で規制を強化したんだ。

A 説明の内容についても、まだ見直す余地がありそうだ。意外と忘れられているのが地盤だ。地盤がダメだと意味がない。国が盛んにいっていた「200年住宅」も、地盤の状況などについてもっとしっかり説明するようにしないとイケない。

B もっともな話だ。また、適正な業務が行われない限り、消費者保護は難しいとの立場から、業務報酬の見直しや設計業務再委託^{註6}の原則禁止なども定められた。構造計算偽装事件でも、業務の委託関係が複雑で責任の所在が曖昧になったからね。

C そういえば、建築士になった後も講習を受けなければいけないそうですね。

B 世の中の動きは早いから、講習などなくても日々勉強しないと仕事はできない。ただ、講習という目に見えるハードルを設けて、それをクリアしてもらおうとの狙いなんだ。講習を受けたかどうかは記録に残り、求められれば記録は公開される。これも、いつてみれば消費者保護の一環だ。

これから▼社会に対する発言を

A 今回の法律改正の全体像を見ると、つまりこういうことなのかな。少子高齢化や産業活動の停滞で、建築需要がいずれ相当減少することは確実で、建築士の数もそれに合わせてスリム化する必要がある。その際には、単に数を減らすのではなく、能力や倫理観が劣る建築士には退場してもらい、建築士全体を「少数精鋭」化する。つまりすれば、出来上がる建築物の質も向上し、失われてしまった建築士の社会的な評価も回復する。

でも、そんなにうまくいくんだろうか。ある会社社員数を減らして少数精鋭にしようとしたのに、結局、優秀な社員から辞められてしまったという話も聞く。今、めざすべき建築士の姿が見えてこないことが、非常に不安なんだよ。

B 現在の建築の仕事が、昔のように魅力を放っているか？、だな。

C 私は高校時代、地域のシンボリックな建物を多く手がけている建築家の作品を見るうちに、自分も設計をしたいと思って建築を志望したんです。

A 残念だけれども、これまでのように、建築そのものが地域のシンボルとなるような仕事は日本ではもう難しいんじゃないかな。

B そんなことはない。都内の木造住宅密集地域などは、建築士のこれからの活躍のフィールドになると思うよ。地域の改善がシンボルとなるんだ。

A その辺りになると、建築士も社会的な動きをしないとイケなくなるな。

B 建築士を少数精鋭にすれば建築物の質が向上するというのも、少し短絡的な気がする。建築に対する社会の理解がないと難しいだろう。

A 新聞なんかを見ても、特に公共建築の話題は「高い」「安い」だけで、建築物の質に関する記事はひとつもない。

B これまで私たちは受身でありすぎたのかもしれない。「少数精鋭」とは別に、私たち自身で今後のありようをきちつと示す必要がある。

A 建築士法うんぬんでなく、これからの建築士をどう育成するかを私たち自身で描き出すことも必要だね。それについては関係する団体や「産・学・官」もまとまっていかなければいけない。

B そのとおりだ。

A 安全で安心できる楽しいまちにはどんな建築物が必要か。どのような仕組みが必要なのか。それに対して、私たち自身、どう取り組むことができるのか。まさに建築士の総合力が問われることになるね。

稲門建築会には様々な人が所属し、情報の宝庫だ。稲門建築会のネットワークを十分に活かして、私たち自身が積極的に社会に情報発信していくことが大切だと思う。

●……………キーワード解説

註1 兼業禁止

建築士は、建築主(依頼者の権利を守り、併せて社会的正当性を貫くために、工事施工の分野とは分離して中立的第三者の立場を保持しなければならない)、との考え方によるもの。

註2 建築確認

建築計画が関係法令に適合しているかどうかを着工前に審査し、適合している旨を判断すること。建築確認する主体の意思ではなく、あくまでも法律の規定により成立する。権利の直接的な付与はない。

註3 認可

本来国民が持っている権利などを新たに与えること。認可する主体の意思による。なお、類似用語の「許可」とは、法律などで一般的に禁止されている行為を解除すること。許可する主体の意思による。

註4 届出

ある行為を放任状態にすると違法行為が行われる可能性がある場合、ある行為を行う前に監督官庁等に事前通知する義務を課した制度。形式として整っていれば受理義務がある。

註5 テキハン

構造計算適合性判定制度。一定規模以上の建築確認における建築構造審査を、工学的見地から再度、行うもの。平成19年7月より実施。

註6 設計業務再委託

受注した設計業務全体を他に再度委託すること。責任の所在が不明確になる。構造計算書偽装事件の際も、問題になった。

●……………構成

豊川士朗(広報委員/中野区都市整備部副参事/苗S9)
間瀬博平(間瀬建設技術コンサルタント事務所/苗S6)
末延史行(旬ケアデザインセッション/苗S52)
協力:田島文隆(旬TAF設計事務所/友S35・苗S39)



内井昭蔵ライブラリー

公一開一懇一談一会一報一告

会場を初めて学外に移したライブラリー
 通算9回目を数えるライブラリー公開懇談会は、内井昭蔵氏を取り上げ、会場を初めて学外に移して、内井氏の代表作のひとつである世田谷美術館で開催されました。懇談会は、世田谷美術館の見学会を同時開催し、2部構成で企画・実施され、一般参加者を含めた約60名が参加しました。

当日はまず見学会が行われ、普段は入ることのできない美術品の収蔵庫などのバックステージから、中庭、外部空間のファサードまで美術館職員の方々に案内していただきながら、盛り沢山の鑑賞となりました。会場にはライブラリーとその一部のパネルを展示していたこともあり、内井氏の建築に対する真摯な姿勢が表れた美しい図面やドローイングと併せて、充実した見学会でした。

懇談会ではゲストに内井乃生氏、長谷川義氏、馬場璋造氏を迎え、司会を古谷誠章先生にお願いし、様々な角度から内井氏の作品づくりと生き様が紹介されました。

内井氏は食事をとても楽しめる方だったそうで、ゲスト各氏から食事に関わるエピソードが多く語られました。海外に行かれた時などは、建築を観ることに同様に現地での食事を大変に楽しみにされていたそうです。そのようなエピソードの中で、ゲストの各氏が万人に愛された内井氏の建築を「おいしいような建築」と表現されたのは大変印象的でした。内井氏の建築は単なる工業製品ではなく、生身の身体感覚である味覚に近い、計り知れない魅力が感じられることから、このようなエピソードを共感をもって拝聴しました。

最後になりましたが、今回の公開懇談会を開催するにあたり、貴重なお時間をいただいたゲストの方々、司会役をお引き受けくださった古谷先生、ご協力いただいた橋本様をはじめとする世田谷美術館の皆様、そしてご尽力いただいた方々に感謝申し上げます。

杉山幸司(事業委員会学生理事/苗H20/修士2年)



「STUDY」展

を終えて

「STUDY」展は、早稲田大学建築学科新4年が昨年手がけた3年時の設計課題の展覧会でした。2月から企画をスタートさせ、新4年の有志33名の作品出展を得て、4月25日(土)〜28日(火)の4日間にわたる展示を行いました。展覧会初日には講演会、2日目は座談会を企画し、いずれも代官山のDaikanyama RGB Gallery(写真1)を会場としました。作品展示においては、ミュージアム、小学校、メディアセンター、自由課題の4課題の展示を行いました。

展覧会のタイトルである「STUDY」とは、ひたすら手を動かし、思考をあらゆる点に巡らせるという、作品をつくり上げていく段階で不可欠な行程を示しています。このように私たちが課題に向き合ってきた姿勢の痕跡を感じていただきたいと考え、ある種の「体験」を通して伝えることを展示計画の軸としました。30cm角のキューブ6面に各自のプレゼンテーションを載せ、来場者は「眺める」に加えてもうひとつ「手に取る」という体験を通じて作品に触れることとなります。これは、斬新で面白い、楽しい、という感想を多くいただく結果となり、新しい展示スタイルを模索する良いきっかけとなったと思います。

講演会では、富樫亮さん(苗S53・院S55)、田中友



写真1(上)「STUDY」展会場風景
 写真2(中)1日目に開催された講演会風景
 写真3(下)富樫氏(左)と田中氏(右)

新任



佐藤宏亮(早稲田大学理工学術院助教/苗H10・院H12)

● 繊細で確かな都市デザインの世紀

このたび早稲田建築における教育の一端を担う機会を与えていただいたことを深く感謝するとともに、その重責を感じております。1994年に学部に入学して以来、雪崩を打つようなバブル崩壊の不穏な轟音を聞きながら、一方では薄明かりの中にほほえる繊細で確かな都市デザインの産声を聞きながら、都市計画分野で研究と実務を経験してきました。世間では「失われた10年」ともいわれる時期でしたが、住民の自治力が新たな都市デザインを育んできた10年でもありました。建築学の責任領域はますます拡がりつつありますが、新しい価値観、世界観を灯し、社会に挑んでいくことが「失われた10年」に学んだ私の使命だと感じています。一人一人の内なる想いに敬意を表し、現代的感覚を伴った共同の力でデザインを生み出して行くことの大切さを学生に伝えながら、まずはこの10年を確実に築いて行きたいと思っております。諸先輩方のご指導、ご鞭撻を心よりお願い申し上げます。

教員



小岩正樹(早稲田大学高等研究所助教/苗H13・院H15・博H18)

● 4月に高等研究所の助教に着任いたしました

3月まで学科助手を務めさせていただきましたが、改めて早稲田建築の一端を担う重責をかみしめつつ、気持ちを新たにしております。

私は、これまで建築史研究室に在籍し、歴史のなかで建築がどのように創造されてきたかというテーマにて、研究して参りました。対象は日本古代ですが、建築とそれに関わる人々が積み重ねてきた姿を遺構や古文書から伝わってくる当時の造営関係者の意図などをもとに、描くことをめざしております。授業としては、製図科目や建築史系の卒業論文指導を担当させていただいております。製図科目ではエスキースや講評会の充実を図りつつ、一方で中川武先生・中谷礼仁先生の研究室と協力して、研究会や調査を行っております。

至らない点が多々あると存じますが、早稲田建築のさらなる発展へ向けて一助となれば幸いです。稲門建築会の皆様におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

紹介



Julian Worrall(ウォラル:シユリアン/早稲田大学高等研究所助教)

● 1969年オーストラリア・アデレード生まれ

アデレード大学及びカリフォルニア大学バークレー校で建築学を学んだ後、2000年10月文部科学省研究留学生として来日。

東京大学大学院 建築学科で都市史学の第一人者伊藤教授のもとで日本の都市空間の公共性の研究に従事。『都市としての鉄道:20世紀東京の鉄道から生み出された公共空間』で2005年博士号取得。建築家としては、ウシタ・フィンレイ(アデレード・東京)、クライン・ダイサム・アーキテクト(東京)、OMA(ロッテルダム)等の建築設計事務所勤務。米国、欧州、アジアの新聞・雑誌への建築・都市についての評論寄稿多数。『Sou Fujimoto:2G no.50』(Editorial Gustavo Gif. 9月)、『21st Century Tokyo: A Guide to Contemporary Architecture』(講談社インターナショナル、11月)が2009年に出版予定。今年4月より早稲田大学高等研究所助教(建築学・都市学専攻)。大都市東京の在り方を現代建築論に取り込む研究を展開。

杉並芸術会館 見学会報告

本年4月16日(木)、杉並芸術会館「座・高円寺」の見学会を催した。

設計は伊東豊雄氏。外観は、黒い鉄板に小さな丸窓がいくつもはめ込まれている。

パールピンクの壁に真珠を彷彿とさせる穴がいくつも空いた、同じく伊東氏設計のミキモト銀座2を見た時と同じ印象を喚起させるデザインである。JR中央線を利用する人は、高円寺駅近くで線路北側に見える不思議な黒アートのような建物を見たことがある人もいらう。

中に入ると、外観に見えた多数の丸窓から差し込む光が水玉模様となり、幻想的な印象を受ける。全体のデザインは、芝居小屋や稽古小屋をイメージしたとのこと。確かに、駅前の賑わいから少し離れた位置に佇む黒く不思議な外観に加え、異世界に迷い込んだかのような内部の幻想性は、世俗から離れ芸術を生み出すための空間といえる。

見学会のコースは、1階の座・高円寺1(小劇場)から始まり、地下1階トイレ↓地下2階の阿波踊りホール↓同階の座・高円寺2(区民ホール)と脇寮屋↓地下3階けいこ場↓同階の作業場↓2階カフェ「アンリ・ファール」↓1階の座・高円寺1裏方の順である。

約1時間半程度の見学会を通して特に強い印象を受けたのは、共用部壁面の水玉模様と、小劇場の屋根裏部分であった。前述した外壁の丸窓によるものだけでなく、螺旋階段の壁面にも照明により同様の水玉模様の演出がなされており、利用者の視線を奪うものとなっている。また、建物の屋根は緩やかな曲線を描いており、高流動性のコンクリートで屋根を打設したとすることで、屋根裏見学の際には参加者の誰もが施工時の様子に関する説明に熱心に耳を傾けていた。

49名が参加した本見学会であったが、その誰にとっても意義のあるものになったのではないだろうか。本建築の施工を担当し、見学会参加者を引率し注釈を加えて下さった大成建設の方々に深く感謝を申し上げたい。

大川亮(事業委員会学生理事/苗H20/修士2年)



2009年度 会長 副会長 理事 監事 幹事

*は2009年度より新任役員

- ◎会長 村松映一(苗S38) ㈱竹中工務店
- ◎副会長 菅原道雄(苗S36) ㈱石本建築事務所
- ◎副会長 橋本忠篤(苗S42) ㈱山下設計
- ◎副会長 入江正之(苗S44) 早稲田大学*
- ◎副会長 杉谷文彦(苗S55) ㈱梓設計*

- ◎総務
 - ◎委員長 清水和彦(苗S53) 三機工業㈱
 - ◎副委員長 小林照雄(苗S47) ㈱大林組
 - ◎副委員長 矢地宏一(苗S51) 鹿島建設㈱*
 - ◎副委員長 伊藤出紀子(苗S56) ㈱竹中工務店*

- ◎役員
 - ◎委員長 関洋之(苗S52) ㈱梓設計
 - ◎副委員長 市川徹(苗S53) 東京ガス㈱
 - ◎副委員長 鈴木康史(苗S59) 東京建物㈱
 - ◎副委員長 近藤豊史(苗S47) ㈱ウツ設計

- ◎役員
 - ◎委員長 大野勝(苗S48) ㈱佐藤総合計画
 - ◎副委員長 山崎隆盛(苗S56) ㈱日建設
 - ◎副委員長 菅順二(苗S54) ㈱竹中工務店*

- ◎事業
 - ◎委員長 星野修一(苗S49) ㈱星野建築構造設計事務所*
 - ◎副委員長 田名網雅人(苗S55) 鹿島建設㈱*
 - ◎副委員長 高口洋人(苗H17) 早稲田大学*
 - ◎副委員長 大川亮(苗H20) 修士2年/長谷見研*
 - ◎副委員長 杉山幸司(苗H20) 修士2年/高口研*

- ◎広報
 - ◎委員長 小菅克己(苗S51) 鹿島建設㈱
 - ◎副委員長 前田寿朗(苗S54) 早稲田大学
 - ◎副委員長 富樫亮(苗S53) ㈱日建設

- ◎事務局
 - ◎事務局長 大木紀通(苗S42) 稲門建築会
 - ◎監事 塚田茂(苗S50) 河合塾マナビス
 - ◎監事 落合弘文(苗S50) 高砂熟学工業㈱

- ◎幹事
 - ◎幹事 木谷建太(苗H15) 早稲田大学
 - ◎幹事 宮津裕次(苗H17) 早稲田大学*
 - ◎幹事 内木博喜(芽S60) 早稲田大学

- ◎役員
 - ◎委員長 早稲田建築合同クラス会2009実行委員会
 - ◎委員長 能勢修治(苗S58) ㈱石本建築事務所*
 - ◎評議員 中川武(苗S42) 早稲田大学*
 - ◎評議員 西谷章(苗S43) 早稲田大学*
 - ◎評議員 古谷誠章(苗S53) 早稲田大学*
 - ◎評議員 吉田拓生(苗S36) ㈱日本開発構想研究所
 - ◎評議員 大越俊男(苗S42) ㈱日本建築センター
 - ◎評議員 可児才介(苗S42) 大成建設㈱
 - ◎評議員 奥平与人(苗S46) 文化女子大学
 - ◎評議員 山下雅己(苗S46) 戸田建設㈱
 - ◎評議員 鹿島裕一(苗S48) ㈱大林組*
 - ◎評議員 田島文隆(友S35) ㈱TAF設計事務所
 - ◎評議員 佐々木光次郎(友S49) 岩槻タクシー㈱
 - ◎評議員 多胡文夫(芽S25)
 - ◎評議員 山田幸司(苗S27)
 - ◎評議員 卯月盛夫(苗S51) 早稲田大学*
 - ◎評議員 反町慶治郎(芽H15) ㈱トヤマインテリナショナルジャパン

- ◎支部
 - ◎支部長 中村谷百則(苗S59) ㈱中村谷*
 - ◎支部 鎌腰勝(友S41) 三共地建*

2008年度 職域別会費納入率ベスト40発表

稲門建築会では、2006年度から組織強化のため78職域で幹事委嘱を行い、幹事の皆様に会費納入率促進をはじめ、会と職域の橋渡し役を務めていただいております。さらに2008年度は職域も86に増え、活発に活動して参りました。昨年7月のニュース82号では2007年度の会費納入率ベスト30をご紹介しましたが、このたび2008年度のデータがまとまりましたので発表します。(2009年3月末日)

昨年度の会費納人口数は、職域幹事の皆様や各企業のOB、並びにすべての稲門OBの皆様のご協力にも

関わらず、前年度比5%の減となりました。世界同時不況の波が、ここにも数字となって表れているものと思われまます。きびしい毎日の業務にもかかわらず、会の運営にご協力いただいている皆様に、改めて心から感謝いたします。また2009年度のさらなる会費納入率アップのため、ご協力をお願いいたします。なお、早稲田建築ニュース86号(11月発行予定)では「2009年度中間全職域会費納入率ランキング」を発表の予定です。

関洋之(理事・会員委員長/苗S52・院S54)

順位	職域名	納入率
1	芝浦工業大学	83.3%
2	㈱観光企画設計社	75.0%
2	㈱都市デザイン	75.0%
4	関東学院大学	66.7%
4	工学院大学	66.7%
4	三機工業(株)	66.7%
4	高砂熟学工業(株)	66.7%
4	東京建物(株)	66.7%
4	日本環境技研(株)	66.7%
4	㈱安井建築設計事務所	66.7%
11	㈱松田平田設計	61.5%
12	東日本旅客鉄道(株)	60.0%
13	早稲田大学	58.0%
14	㈱山下設計	57.9%
15	㈱入江三宅設計事務所	57.1%
16	㈱三菱地所設計	56.9%
17	大成建設(株)	52.0%
18	㈱梓設計	50.0%
18	㈱佐藤総合計画	50.0%
18	鉄建建設(株)	50.0%
18	野村不動産(株)	50.0%
22	東京急行電鉄(株)	45.5%
23	東京電力(株)	43.8%
24	㈱新建築社	42.9%
24	㈱東急設計コンサルタント	42.9%
24	㈱日建ハウジングシステム	42.9%
24	森トラスト(株)	42.9%
28	三菱地所(株)	42.1%
29	戸田建設(株)	42.0%
30	安藤建設(株)	41.7%
30	㈱NTTファシリティーズ	41.7%
32	北野建設(株)	40.0%
32	佐藤工業(株)	40.0%
34	㈱日建設計	39.8%
35	前田建設工業(株)	39.4%
36	東京ガス(株)	38.7%
37	森ビル(株)	38.5%
38	国土館大学	37.5%
39	㈱久米設計	35.2%
40	清水建設(株)	34.1%

- ◎支部長
 - ◎北海道支部 染谷哲行(苗S48) アルコム計画工房
 - ◎東北支部 柴田直政(苗S55) 鹿島建設㈱
 - ◎信越支部 宮本忠長(芽S23) ㈱宮本忠長建築設計事務所
 - ◎北陸支部 照田繁隆(苗S44) ㈱石川県建築住宅総合センター*
 - ◎静岡支部 鎌腰勝(友S41) 三共地建*
 - ◎名古屋支部 猪岡達夫(苗S41) 中部大学*
 - ◎近畿支部 重村力(苗S41) 神戸大学*
 - ◎中国支部 佐藤立美(苗S42) 広島工業大学
 - ◎四国支部 中村谷百則(苗S59) ㈱中村谷
 - ◎九州支部 金剛伸幸(苗S37)

2009年度 春の大会 報告

●……… 通常総会

5月27日(火)、西早稲田キャンパス55号館N棟大会議室において、春の大会、通常総会が開催された。

清水和彦理事(苗S53)の司会により、村松映一会長(苗S38)が冒頭の挨拶。事務局が定刻の18時に定足数を確認し、会長が議長となり開会が宣言された。議事録署名人の選任の後、議事に入った。

橋本忠篤副会長(苗S42・院S4)が2008年度の活動報告および収支報告と、2009年度の活動計画案および収支算案の説明、塚田茂監事(苗S50・院S52)が2008年度会計ならびに業務監査報告をそれぞれ行い、いずれも異議なく承認された。2009年度は建築学科創設100周年に当たる。教室と稲門建築会が協力して記念事業を実施する方針なども説明された。簡潔にまとめられた各報告により、議事は例年より早い18時25分、つづがなく終了した。

引き続き、第12回稲門建築会特別功労賞の授与に移った。田中義吉氏(苗S37・院S39)、伊勢崎賢治氏(苗S56・院S61)の2氏に対し、村松会長が表彰状と記念品を贈呈した。丸山欣也氏(苗S37・院S39)、森川嘉一郎氏(苗H7・院H9・博H12)の2氏は残念ながら所用のため欠席された。

次いで、役員の新体制移行に伴って退任する理事、評議員を代表して、大高一博前会員委員長に対し、村松会長が感謝状を贈呈した。

最後に、入江正之副会長が学園の近況について報告。受験者数が漸減するなかで、高校生に対するオープンカレッジや広報活動の在り方を学内で話し合っていること、学生にどう力を付けていけるか、社会へ送り出していくかが課題という点などを指摘した。

●……… 特別講演・長谷川堯氏 「建物と建築を考える」



「神殿か獄舎か」や「都市回廊」などの著書で名高い建築評論家・長谷川堯氏は、早稲田大学文学部を1996年に卒業した。

もともと美術史を専攻していた氏は、ミース・ファン・デル・ローエやル・コルビュジエ、W・グロピウスを卒論のテーマにしたのをきっかけに、建築評論の道に足を踏み入れる。特に、村野藤吾との出会いは大きく、これまで数多くの村野論を執筆されている。

今回の講演では、「日本に建物は多いが、建築と呼べるものは少ないのではないか」という氏の問題意識を踏まえ、村野が若いころに修業し、その建築観に大きな影響を与えた渡辺建築事務所時代を中心に振り返った。

村野は学生時代、様式建築をやりたいとなくしてゼセッションばかりやっていて」と語っていたが、渡辺建築事務所時代に描いたディテールは十分に様式建築の素養を感じさせること。ある対談で長谷川氏が「建築は芸術ですよ」と問いつけたところ、村野は「建築は芸術ではない」と答えた。村野は「建築家は数億円で託されていくことを思えば簡単に「芸術」とはいえないという姿勢を示した。日生劇場の内部天井や千代田生命保険本社(現・目黒区役所)の壁柱などのデザインは、渡辺建築事務所時代の設計にその萌芽が見られること、などが語られた。

村野と直接やりとりした思い出など、豊富なエピソードを織り交ぜた長谷川氏の話題は尽きず、あっという間に規定の時間は過ぎた。用意していたいたいたスライドをすべて拝見できなかったのは大変残念だった。「接する人間の心や魂に働きかける何かを備えた建物が、建築と呼べる存在になる」という長谷川氏の言葉は、特に若い聴講者の心に響いたのではないだろうか。

●……… 懇親会

この後、会場を第1会議室に移して懇親会が開催された。会中は中川武教授の発声による乾杯で始まり、関洋之理事(苗S52・院S54)の司会で和やかに進んだ。

特別功労賞受賞者の挨拶では、30年以上大学で講師を務められた田中氏が「学生時代に開いたダンスパーティーでは、人が集まり過ぎて赤字になった」という思い出話を披露。国際紛争などの場で活躍してきた伊勢崎氏は、「大学院進学直前に恩師の吉阪隆正先生が亡くなったことで、私は道を踏み外した」と笑いを誘った。続いて、2008年度秋に旭日中経章を受けた石川洋美氏(苗S33)が紹介された。長く芝浦工大で教え、現在は同大学の名誉理事長である氏は、「早稲田での教育を通して、大学とはどうあるべきかを学んだ」と振り返った。

しばしの歓談後、入江先生、2008年度に学位を受けた土屋伸一氏(博H19)、田村望氏(苗H9・院H11)、富樫英介氏(苗H16・院H18・博H12)が挨拶した。また、日本建築学会の新会長に選任された佐藤滋教授のほか、副会長の可児才介氏(苗S42)や代議員の曾田五月也教授(苗S46)、大野勝氏(苗S48)、評議員の高口洋人准教授(苗H7)が意気込みを語った。

学会選奨を受賞した能勢修治氏(苗S58・院S60)と兒玉謙一郎氏(苗H2)による挨拶の後、今年度の合同クラス会実行委員長の能勢氏、建築展実行委員長の石黒雅之さんがそれぞれの開催概要を説明した。建築学科創設100周年の冠がつく合同クラス会は、今和次郎をテーマにしたシンポジウムを計画中。建築展は、55号館のメイン展示を中心に4つのプロジェクトを実施する。

最後は白髭卓之氏(友S44)の発声に導かれ、全員が肩を組んで校歌を歌い上げ、無事に会はお開きとなった。

守山久子広報理事/苗S61、石黒唯嗣広報理事/芽H14



最後に、入江正之副会長が学園の近況について報告。受験者数が漸減するなかで、高校生に対するオープンカレッジや広報活動の在り方を学内で話し合っていること、学生にどう力を付けていけるか、社会へ送り出していくかが課題という点などを指摘した。

村野と直接やりとりした思い出など、豊富なエピソードを織り交ぜた長谷川氏の話題は尽きず、あっという間に規定の時間は過ぎた。用意していたいたいたスライドをすべて拝見できなかったのは大変残念だった。「接する人間の心や魂に働きかける何かを備えた建物が、建築と呼べる存在になる」という長谷川氏の言葉は、特に若い聴講者の心に響いたのではないだろうか。

この後、会場を第1会議室に移して懇親会が開催された。会中は中川武教授の発声による乾杯で始まり、関洋之理事(苗S52・院S54)の司会で和やかに進んだ。

◎2008年度 決算報告書(案)

自 2008年4月1日
至 2009年3月31日

資産の部		負債・積立金の部	
科目	金額	科目	金額
現金	0	未払金	560
繰越剰余金	883,335	預り金	40,000
普通預金	10,284,305	前受金	3,440,000
定期預金	27,238,055	事務費準備金	480,000
未収金	1,191,150	積立金	26,000,000
立替金	0	特別積立金	7,302,152
仮払金	0	(合同クラス会運営基金積立金)	6,544,057円
生協出資金	15,000	決算額	758,055円
			2,349,133
合計	39,611,845	合計	39,611,845

2009年3月31日現在

単位:円

収支計算書

勘定科目	年予算	実績金額	予算実績差額
【会費及び入会金】			
年会費(正)	13,000,000	12,145,000	△855,000
年会費(協)	2,300,000	2,170,000	△130,000
学生会費			
入会金(協)	0	0	0
【維持費】			
維持費	4,000,000	3,770,000	△230,000
【寄付金】			
寄付金	0	300,000	300,000
【活動に伴う収入】			
広告収入	1,800,000	1,169,550	△630,450
名簿収入	0	0	0
その他活動収入	700,000	834,500	134,500
【資産から生じる収入】			
受取利息	70,000	112,538	42,538
【その他収入】			
雑収入	0	31,064	31,064
【準備金取崩し】			
事務費準備金	300,000	300,000	0
【前年度繰越金】			
前年度繰越金	1,936,439	1,936,439	0
収入合計	24,106,439	22,789,091	△1,317,348

単位:円

●支出の部

勘定科目	年予算	実績金額	予算実績差額
【会費】	1,100,000	948,000	152,000
会費取崩し	300,000	404,532	△104,532
名簿整備費	550,000	296,014	253,986
オンデマンド名簿発行費	0	0	0
新名簿運用費	20,000	5,000	15,000
GISの仕事情紹介	150,000	202,450	△52,450
熱湯復話	80,000	40,004	39,996
【広報】	6,450,000	6,117,385	332,615
早稲田建築ニュース発行費	4,250,000	4,210,052	139,948
イマージュブック発行費	2,600,000	1,863,233	1,36,767
概要書発行費	100,000	0	100,000
ホームページ・メルマガ運営費	100,000	44,100	55,900
【事務】	860,000	705,967	154,033
見学会・セミナー開催費	160,000	192,730	△32,730
図面ライブラリー	600,000	513,237	86,763
活動支援費	100,000	0	100,000
【総務】	2,970,000	2,543,798	426,202
総会会議費	500,000	482,555	17,445
補助金・支部	950,000	950,000	0
〃 〃 合同クラス会	200,000	0	200,000
〃 〃 学生	900,000	890,376	9,624
稲門建築会費	30,000	28,518	1,482
顕彰制度運用費	100,000	72,299	27,701
日本建築学会選挙	110,000	98,888	11,112
口産経システム運用費	100,000	21,166	78,834
組織活性化対策費	80,000	0	80,000
活動費計	11,380,000	10,315,150	1,064,850
【運営費】	150,000	138,816	11,184
事務費	8,000,000	7,803,711	196,289
PC環境整備費	80,000	1,190	78,810
用品費	80,000	59,335	20,667
通信費	170,000	138,510	31,490
交通費	1,200,000	1,059,130	140,870
印刷費	500,000	509,977	△9,023
支払手数料	420,000	354,977	65,023
職場給費	50,000	21,315	28,685
雑費	50,000	38,309	11,691
運営費計	10,700,000	10,124,808	575,192
予備費計	2,026,439	0	2,026,439
支出合計	24,106,439	20,439,958	3,666,481
決算収支差額	—	2,349,133円	505,000円

単位:円

決算処分案

決算収支差額		2,349,133円
処分金		505,000円
(事務費準備金)	105,000円	
(60周年準備積立金)	200,000円	
(合同クラス会運営基金積立金)	200,000円	
次年度繰越金		1,844,133円

2009合同クラス会・理工展は11月7日(土)開催!

第12回稲門建築会特別功労賞
受賞者紹介(表彰理由より要約)

田中義吉氏(苗S37・院S39)



「昭和女子大学人見記念講堂」などの構造設計を手がけたほか、日本建築学会ほかの構造関連の規準類作成に携わった。また34年にわたり建築学科非常勤講師として建築工学実験Aと建築構造製図を担当。新生早苗会合同クラス会の発足準備に参画して合同クラス会を成功に導き、今日の合同クラス会の礎を築いた。

丸山欣也氏(苗S37・院S39)



国際的な建築家として数多くの優れた作品を創出し、独創的な視点をもつ研究者として早稲田大学をはじめ海外の多くの大学で精力的な教育活動を展開。合同ワークショップや講演などを通じ、伝統ある早稲田建築の名を広く世界へ知らしめた。31年の長きにわたり、芸術学校の非常勤講師や客員教授を務めた。

伊勢崎賢治氏(苗S56・院S61)



インドでの活動やNGOでのアフリカの救済活動を経て、「開発や環境計画」から「平和の構築」の世界へ。東チモール、シエラレオネでの国連活動、アフガニスタンで日本政府の代表として行ったDDR(武装解除・動員解除・復興)活動などが有名。合同クラス会や近畿支部の会にもゲストスピーカーとして参加している。

森川嘉一郎氏(苗H7・院H9・博H12)



論文をまとめたエッセイ『趣都の誕生 萌える都市アキハバラ』は大ベストセラーになり、今の秋葉原ブームの発端のひとつになった。イタリアのヴェネチア・ビエンナーレ建築展のコミッションナーとして展示計画に参画。本格的国際化社会を迎えるにあたり、従来の早稲田建築にはない独特な世界を切り拓くことを期待されている。

WA2009訂正

「WA2009」の43頁「学生優秀作品」と50～51頁に掲載した「各賞受賞者」について追記と誤記の修正をいたします。訂正は左記のとおりです。訂正し、関係者の皆様へ訂正感をおかけしてまいりましたことをお詫言申し上げます。

「優秀卒業論文賞」追記：倉本太一、那子香(嘉納研)「建築生産における品質確保に関する研究」他産業における関係者の在り方の比較研究」

50頁 「日本建築学会優秀卒業論文賞」賞状：真鍋裕子

51頁 「日本建築学会優秀卒業論文賞」賞状：真鍋裕子

「KOFIAT EXPO 2008 Asia Scenography and Theatre Architecture Competition」入賞：鈴木西奈

「FDAS」毎日学生デザイン賞 建築部門賞(写真)写真：左から荒木熊平、平須賀正、左から熊谷、荒木、平須賀

2008年度会費・維持費納入者

年会費に加え、維持費納入にもご協力賜りました。ありがとうございます。

10口	植田雅尚	河野勝	河内勝	福山健治	名古屋市の	松本洋一
新藤海	河野勝	河内勝	河内勝	鈴木清和	名村英紀	松本洋一
6口	上原正彦	河内勝	河内勝	鈴木清和	松本洋一	松本洋一
3口	河内勝	河内勝	河内勝	鈴木清和	松本洋一	松本洋一
2口	河内勝	河内勝	河内勝	鈴木清和	松本洋一	松本洋一
1口	河内勝	河内勝	河内勝	鈴木清和	松本洋一	松本洋一

討報

左記の方々からなくなった貸事務局長にお知らせいただきまして、謹んで賞賛をお祈りいたします。

- 田中行平(苗S23)H20.12.12
- 加藤角一(苗S26)H21.3.3
- 藤田文彦(苗S26)H21.2.9
- 佐々木實(苗S27)H20.11.30
- 酒井利巳(苗S27)H20.3.31
- 榊原市蔵(苗S28)H20.12.6
- 江面栄一(苗S29)H19.12.18
- 八矢英世(苗S29)H20.9.21
- 八木和(苗S29)H20
- 小林秀造(苗S32)H21.3.12
- 石塚敬(苗S42)H18.7
- 青木修(苗S42)H10.6.14
- 小崎弘一(苗S44)H20.5
- 齊藤悦夫(苗S46)H21.2.20
- 岡崎伸彦(苗S53)H21.4.20
- 中前久司(苗S53)H21.2.5
- 野々口雅人(苗S57)H19.6.2
- 渡邊進介(苗H13)H21.3.15
- 小島康太郎(院H6)H20.12.12
- 北湯口正夫(友S9)H10
- 加藤丹次郎(友S12)H21.2.3
- 石田隆三(友S13)H20.11.11
- 林晴雄(友S16)H7
- 西方秀男(友S28)H21.3.31
- 所儀雄(工S6)H21.2.20
- 鈴木重信(工S7)H21.2.25
- 小林嘉吉(工S17)H17.8.28
- 片岡毅(工S25)H21.1.23
- 佐藤哲造(院S19)H19.11.28
- 西村二郎(院S19)H20.9.28
- 下村幸忠(院S20)H21.1.26
- 櫻井莊一(院S22)H21.3.24
- 長谷川亮輔(院S24)H21.3.29

主な会務の報告

2009年3月以降の主な会務を報告します。

- 第5回理事会：第2回評議員会：4月21日
- 臨時理事会：タールによる持回り理事会：5月8日
- 09年度支部長会：5月13日
- 09年度支部長会：5月13日
- 09年度春の大会(通常総会・特別講演会・懇親会)：5月27日
- 建築学科創設100周年事業推進委員会(第1回)：6月16日
- 09年度第1回理事会：第1回評議員会：6月24日
- 活動
 - メールマガジンの発行：4、5、6、7月号
 - 「ヤープックWA2009」の発行：3月25日
 - 大学・建築学科・芸術学校卒業式(会長・副会長挨拶)：3月25日
 - 芸術学校入学式(副会長挨拶)：4月4日
 - 建築学科新入生ガイダンス(会長挨拶)：4月9日
 - 第1回見学会：4月16日
 - 新入生オリエンテーション(清水総務委員長)：5月23日
 - 第1回設計製図公開講演会支援：6月6日

事務局便り

新制大学第1回卒業生を出した1951年、内藤多仲先生の提唱により、早苗会、稲友会、稲工会、響会が大団結し、稲門建築会が設立された。その後、稲友会が加わり5部会となった。今回はその構成を表で紹介する。表からわかるように会員の皆様の出身母体は多様である。これらの方々の意思を通じさせる環境を提供することが稲門建築会の大きな役目である。

部会	区分	母体校	学科	開設年	歳次	改称
早苗会	旧制早苗	早大理工科	建築学科(本科)	1910	1960	
	旧制大学院	早大大学院	工学研究科	1920	1960	
稲友会	新制早苗	早大第1理工学部	建築学科	1949	1948	
	早苗2部	早大第2理工学部	建築学科	1949	1968	
	新制大学院	早大大学院	工学研究科	1951		
稲工会	工業経営	早大理工学部	建築学専攻	1935	1951	
	工学学校	早大付属早稲田工学学校	建築科	1911	1948	
響会	工業学校	早大付属早稲田工業学校	建築科	1946	1948	
	工業専科	早大工業高等専門学校	建築科	1948	1968	
稲身会	産専	早大産業技術専修学校	建築科	1964	1978	
	高等工学学校	早大付属早稲田高等工学学校	建築学科	1928	1951	
稲身会	専門部工科	早大専門部工科	建築学科	1939	1951	
	専門部学校	早大専門部学校	建築学科	1978	2001	
部会下		芸術学校	早大芸術学校	2,453/3,617		

部会下の数字は2009.7.2現在の通信可能会員数/全会員数

編集後記

今回は「建築士とは」という、これまであまり触れられず、誰でも理解しているように感じて実は極めて難解な「私だけにとっかかりませんが、...」テーマで仮想座談会を構成する、新しい試みでした。最新の建築関係の法律改正は「屋上屋を築す」状況が著しく、ほんやうしている法律制度的の中に埋没してしまっています。いろいろな視点から、飲み屋に行つて仲間と建築やまちづくりを熱く話るともなってきました。

豊川士朗(広報委員/苗S59/中野区都市整備部副参事)